

体育大会が中学生の自己効力感や学校適応感に及ぼす影響についての検討
—自己肯定感の違いに着目して—

横山里沙*¹, 古田真司*²

*¹ 愛知教育大学大学院教育学研究科

*² 愛知教育大学養護教育講座

A Study of the Influence of a Sports Day on Self-Efficacy and School Adaptation
in Junior High School Students
— Focusing on Difference of Self-Esteem —

Risa YOKOYAMA*¹, Masashi FURUTA*²

*¹ Graduate School of Education, Aichi University of Education

*² Department of School Health Sciences, Aichi University of Education

[別刷]

東海学校保健研究

第36巻 1号 2012年9月

体育大会が中学生の自己効力感や学校適応感に及ぼす影響についての検討 —自己肯定感の違いに着目して—

横山里沙*¹, 古田真司*²

*¹ 愛知教育大学大学院教育学研究科

*² 愛知教育大学養護教育講座

A Study of the Influence of a Sports Day on Self-Efficacy and School Adaptation in Junior High School Students

— Focusing on Difference of Self-Esteem —

Risa YOKOYAMA*¹, Masashi FURUTA*²

*¹ Graduate School of Education, Aichi University of Education

*² Department of School Health Sciences, Aichi University of Education

Abstract

The purpose of this study was to investigate the influence of a sports day on self-efficacy and school adaptation based on differences in the score of self-esteem in junior high school students.

This study was conducted by questionnaire consisting of items of self-esteem, self-efficacy, school adaptation, and feelings during sports day. The questionnaire was given to students in the third year of one junior high school in Aichi prefecture. The survey was conducted three times, before and after the sports day and after one month.

The main results were as follows.

- 1) There is sex difference in feelings during sports day, with girls having more positive feelings than boys.
- 2) While changes influenced by feelings of self-efficacy and school adaptation during sports day were not seen in the group with high self-esteem, changes were seen from the feelings and time to self-efficacy or school adaptation in the group with low self-esteem. Furthermore, self-efficacy and school adaptation changed easily in the group with middle level of self-esteem, compared with low group or high group, and this group was easily affected by sports day.

キーワード (Key Words) :

体育大会, 自己肯定感, 自己効力感, 学校適応感, 反復測定

sports day, self-esteem, self-efficacy, school adaptation, repeated measurements

I. はじめに

体験活動は、学習指導要領¹⁾において、豊かな心を育み「生きる力」を育てるものとして、その重要性が説かれており、その一つである学校行事は、年間を通して数多く行われ、学校において大きな位置を占める。中でも体育大会は、最も大きな学校行事のうちの一つである。体育大会は、学習指導要領において、特別活動の「学校行事」の中に、「健康安全・体育的行事」として位置づけられている。「学校行事」の内容は、「全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、集団への所属感を深め、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。」とされている。また、その中の「健康安全・体育的行事」の内容は、「心身の健全な発達や健康の保持増進などについての理解を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行うこと。」とされている。後々²⁾は、学校行事を通して育てたい力について、①自尊・自立に関係する価値 [承認, 自己責任, 個性の伸長], ②人間関係 [思いやり, 共感, 協力, 生命尊重], ③社会参画 [共生, マナー, きまり, 帰属意識, 集団への寄与] の3点を挙げている。このように、体育大会では、運動能力や体力の向上だけでなく、集団への所属感や責任感を深めること等によって、学校生活の充実につなげることも目的となっており、身体はもとより心理的側面の発達も求められていることがうかがえる。

一方、近年、子どもたちの心の問題が増加する中で、彼らの自然体験や生活体験等を経験する機会の減少が懸念されている。国立青少年教育振興機構³⁾が行った子どもの体験活動実態調査によると、年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友だちとの遊びが減ってきていることが明らかになっている。このような現状の中で、学校行事はどの子どもでも経験できる体験活動の一つであることから、子どもたちの心理的・身体的発達にとって重要な役割を担っている。そのため、その効果について検証することは重要であると考えた。

これまで、学校行事や体験活動が子どもたちの自己肯定感や自己効力感に及ぼす影響については、いくつかの研究が行われている。西山⁴⁾は、中学生から高校生を対象に自己肯定感と体験の関係について調査しており、自己肯定感が高い群の方が低い群に比べてあらゆる体験が多いことを明らかにした。また、集団宿泊体験やキャンプ経験と自己効力感等の関係については、集団宿泊体験で自己効力感や自己概念が変容することが報告されている^{5) 6)}。長谷川⁷⁾は、体育大会の教育的意義について、中学生を対象に文化的階層と自己概念や体育大会効用感との関連を調査した。その結果、文化的階層が上位の生徒は体育大会効用感や満足感が高く、勤勉性が正の影響を与えていたこと、また文化的階層が下位の生徒には自己有能感や社交性が正の影響を及ぼしていたことを報告しており、子どもによって体験が与える影響が異なることが明らかになっている。

その一方、これまで体育大会の前後で自己肯定感や自己効力感を比較した研究はあまりみられず、体育大会がそれらの要因にどのように影響を及ぼしているかは明らかになっていない。横山⁸⁾も、子どもの自尊感情と体験の関係について、近年報告されている調査・研究をもとに検討を行い、「子どもの自尊感情と、1) 生活体験, 2) 手伝い体験, 3) コミュニケーション体験, 4) 遊び体験, 5) 自己管理体験, 6) 被称賛体験といった体験との間には密接な関係があるが、いずれの調査・研究も研究方法として因果関係を明らかにする手法はとられていない。」と述べている。

そこで本研究では、中学校生活において、子どもたちの行動や心理状態に大きな影響を与えていると考えられる学校行事のうち、体育大会に焦点を当て、自己肯定感の得点の違いによって、体育大会で得られる感情が子どもたちの自己効力感や学校適応感にどのように影響を与えるのかについて、体育大会の直前、直後とその1ヶ月後に調査することにより検討を行う。子どもによって体験が与える

影響が異なることから、本研究においても、子どもが持つ特徴別に体育大会の影響を調べることが必要であると考え、本研究では自己肯定感の得点別に体育大会が自己効力感や学校適応感に与える影響について検討することにした。

本研究では中学生を対象に調査を行った。中学生は、これまでに多くの体験活動を経験してきている一方、第2発育急進期を迎え、子どもから大人への心の葛藤が起り、様々な発達課題や危機に直面しやすいため、精神的に不安定になりやすい時期である。戸梶⁹⁾が感動体験の効果について大学生を対象に行った調査のなかで、「特に思春期や青年期においてなされる体験は、時としてその個人の人生において重要な転換点になることもある。」と述べていることからわかるように、このような時期に自己効力感等を支える要因のひとつと考えられている体験の実態を知ることが、学校現場にとっても重要であると考えた。体育大会は、多くの子どもたちにとって印象的な思い出として残る行事であり、その意義を自己効力感や学校適応感の面から捉えることは、今後、学校行事をより効果的なものにするための一助とすることができるのではないかと考えた。

II. 研究方法

1. 調査時期および対象

対象は、愛知県内のA中学校3年生の生徒263名である。A中学校は、課外学習や体験学習の頻度は近隣の学校とほぼ同じである一般的な中学校である。調査は、2011年10月上旬にA中学校で行われた体育大会の前後と、その約1ヶ月後の11月上旬に行った。3回のアンケートに全て回答した者を有効回答者とし、有効回答者は195名、有効回答率は74.1%であった。調査は自記式質問紙調査によって行い、調査項目の適切さと回答可能性を高めるため、A中学校の校長と教員の協力を得て、事前に項目のチェックをお願いし、若干の修正を加えて実施した。また、質問紙で得た回答は研究のみに使用し個人情報漏れることがないこと、回答するかどうかは自由意志である旨を説明し、調査の同意が得られた生徒から質問紙を回収した。

2. 調査項目

質問紙は、体育大会前（大会3日前）と1ヶ月後では自己肯定感尺度と自己効力感に関する項目と学校適応感に関する項目、体育大会直後（体育大会休み明けのはじめの登校日）では、それらに加えて体育大会で感じた気持ちについての質問で構成されている。

(1) 自己肯定感尺度

自己肯定感の測定には、Rosenberg¹⁰⁾の「全般」の尺度日本語版10項目¹¹⁾を使用した。質問内容は、生活の満足感、自己の長所への気づき、人間関係の中の役割意識、行動面では失敗への不安などを取り上げている。具体的な質問項目は、「私は全ての点で自分に満足している」「自分にはいくつか長所があると思う」「私は、自分のよい面に目を向けるようにしている」などである。アンケートでは「そう思わない」「ややそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」の4段階で回答を求め、段階順に1点～4点に点数化し、合計点を自己肯定感得点とした。そして、自己肯定感得点を男女別に $-1/2SD$ 以下、 $-1/2SD \sim +1/2SD$ 、 $+1/2SD$ 以上の3群に分類し、 $-1/2SD$ 以下の者を自己肯定感得点低群、 $-1/2SD \sim +1/2SD$ の者を自己肯定感得点中群、 $+1/2SD$ 以上の者を自己肯定感得点高群とした。

(2) 自己効力感に関する項目

自己効力感の測定には、成田ら¹²⁾が作成した特性的自己効力感尺度を参考に質問項目を作成した。

質問内容は、「行動を起こす意思」「行動を完了しようとする意志」「逆境における忍耐」などから構成されている。具体的な質問項目は、「自分が立てた計画は、うまくできる自信がある」「新しい友達を作るのが苦手だ」「面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる」「何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる」などである。本研究では、同じ内容の調査を繰り返して行うことによる生徒の負担を考慮して、できるだけその負担を軽減することを目的に、成田らの全23項目の中から内容的に類似する8項目を除外して15項目選出し、「まったくあてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の5段階で回答を求め、段階順に1点～5点に点数化し、合計点を自己効力感得点（高い方が自己効力感が高いと解釈する）とした。

(3) 学校適応感に関する項目

学校適応感の測定には、石田¹³⁾の作成した学校適応感尺度を参考に質問項目を作成した。この尺度は、友人関係、学習関係、教師関係、学校全体の4つの側面から設定されている。具体的な質問項目は、「この学校の友達と一緒にいると楽しい」「この学校の授業を受けるのは楽しい」「この学校の先生には安心して何でも相談できると思う」「この学校の生徒であることがうれしい」などである。本調査では、やはり生徒の負担を軽減することを目的に、全16項目のうち、石田らの研究の中で示された因子分析結果から、因子（下位尺度）ごとに因子負荷量の高いものからそれぞれ3項目ずつ、計12項目を選び、「まったくあてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の5段階で回答を求め、段階順に1点～5点に点数化し、合計点を学校適応感得点（高い方が学校適応感が高いと解釈する）とした。

(4) 行事で感じた気持ち

体育大会直後のアンケートでは、自己効力感に関する項目、学校適応感に関する項目に加えて、体育大会で感じた気持ちについての質問項目を設けた。質問項目は、斎藤ら¹⁴⁾が感動体験の調査に用いた用語と、大出ら¹⁵⁾が分類した感動語を参考に設定し、「うれしい」「楽しい」「達成感」「元気が出た」「わくわくした」「興奮」「ジーンとした」「驚いた」「満足」「喜び」「胸がいっぱい」「充実感」「成功」「苦しい」「つらい」「悔しい」「悲しい」「嫌だ」「特に何も感じない」の19項目の中から、あてはまるものを全てを答えるという形で回答を求めた。

その結果から、「うれしい」「楽しい」「達成感」「元気が出た」「わくわくした」「興奮」「ジーンとした」「驚いた」「満足」「喜び」「胸がいっぱい」「充実感」「成功」のポジティブな感情のみを答えた群をA群、それらポジティブな感情に加えて「悔しい」と回答した群をB群、ポジティブな感情の有無に関わらず「苦しい」「つらい」「悲しい」「嫌だ」のネガティブな感情を答えた群をC群、「特に何も感じない」と答えた群をD群とし、本研究では、主として体育大会直後の感情をこの分類に基づいて検討し、他の要因との関連を分析した。

3. 分析方法

調査集計と統計解析には、統計パッケージソフト「SPSS19.0J for Windows」を用いた。2群の平均値の差の検定にはt検定を、体育大会後の感情の回答割合の性別比較には記述統計と χ^2 検定を、繰り返しのある二要因の平均値の検定には、二要因反復測定分散分析を行った。有意確率は $p < 0.05$ をもって有意とした。

Ⅲ. 結果

1. 自己肯定感得点・自己効力感得点・学校適応感得点の性別比較

体育大会前の自己肯定感得点の平均値（±標準偏差）は、男子23.0（±4.4）、女子21.9（±4.3）であり、性別比較のためにt検定を行ったところ、男女に有意な差はみられなかった。自己効力感得点の平均値（±標準偏差）は、男子43.6（±8.2）、女子44.1（±8.3）であり、男女で有意な差はみられなかった。学校適応感得点の平均値（±標準偏差）は、男子39.6（±7.4）、女子38.7（±7.4）であり、男女で有意な差はみられなかった（表1）。自己効力感に関する項目の信頼性と学校適応感に関する項目の信頼性をCronbachの α 係数で求めたところ、自己効力感に関する項目では $\alpha = .777$ 、学校適応感に関する項目では $\alpha = .825$ であった。

表1 自己肯定感得点・自己効力感得点・学校適応感得点の平均値と男女比較

	男(n=97)		女(n=98)		t	p
	平均値	(SD)	平均値	(SD)		
自己肯定感得点	23.0	(4.4)	21.9	(4.3)	1.751	.082
自己効力感得点	43.6	(8.2)	44.1	(8.3)	-.436	.663
学校適応感得点	39.6	(7.4)	38.7	(7.4)	.867	.387

注1)nは度数、pは有意確率

注2)自己肯定感得点(10項目)は10~40、自己効力感得点(15項目)は15~75、

学校適応感得点(12項目)は12~60

注3)検定はt検定

2. 体育大会での感情の回答人数と割合

体育大会で得られた感情（直後の気持ち）の回答人数について記述統計を行った（図1）。その結果、A中学校の3年生は、体育大会で「楽しい」「うれしい」「達成感」などのポジティブな感情を多く抱いていることがわかった。それぞれの項目の回答割合について男女差をみるために χ^2 検定を行ったところ、「うれしい」「楽しい」「わくわくした」「喜び」では女子の方が男子よりも有意に高く、「特に何も感じない」では男子の方が女子よりも有意に高かった（表2）。

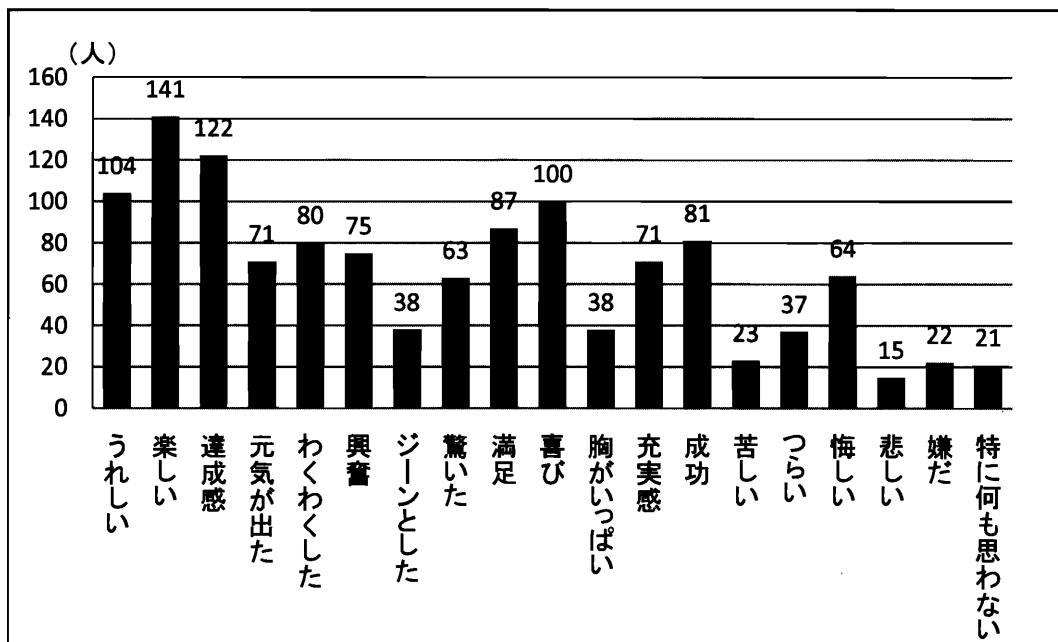


図1 体育大会で得た感情の回答人数 (複数回答、n=195)

表2 体育大会で得た感情の回答割合の男女差

		なし		あり		χ^2	p	平均値の 男女比較
		n	(%)	n	(%)			
ポジ テイ ブ な 感 情	うれしい	男	57 (58.8)	40 (41.2)	10.400	.001 *	男<女	
		女	34 (34.7)	64 (65.3)				
	楽しい	男	37 (38.1)	60 (61.9)	9.517	.002 *	男<女	
		女	17 (17.3)	81 (82.7)				
	達成感	男	41 (42.3)	56 (57.7)	1.536	.215		
		女	32 (32.7)	66 (67.3)				
	元気が出た	男	66 (68.0)	31 (32.0)	1.291	.256		
		女	58 (59.2)	40 (40.8)				
	わくわくした	男	66 (68.0)	31 (32.0)	5.834	.016 *	男<女	
		女	49 (50.0)	49 (50.0)				
	興奮	男	62 (63.9)	35 (36.1)	.283	.595		
		女	58 (59.2)	40 (40.8)				
	ジーンとした	男	82 (84.5)	15 (15.5)	1.514	.219		
		女	75 (76.5)	23 (23.5)				
	驚いた	男	70 (72.2)	27 (27.8)	1.382	.240		
		女	62 (63.3)	36 (36.7)				
満足	男	61 (62.9)	36 (37.1)	3.813	.051			
	女	47 (48.0)	51 (52.0)					
喜び	男	57 (58.8)	40 (41.2)	7.016	.008 *	男<女		
	女	38 (38.8)	60 (61.2)					
胸がいっぱい	男	84 (86.6)	13 (13.4)	3.816	.051			
	女	73 (74.5)	25 (25.5)					
充実感	男	67 (69.1)	30 (30.9)	2.057	.152			
	女	57 (58.2)	41 (41.8)					
成功	男	61 (62.9)	36 (37.1)	1.215	.270			
	女	53 (54.1)	45 (45.9)					
ネガ テイ ブ な 感 情	苦しい	男	81 (83.5)	16 (16.5)	3.248	.071		
		女	91 (92.9)	7 (7.1)				
	つらい	男	75 (77.3)	22 (22.7)	1.278	.258		
		女	83 (84.7)	15 (15.3)				
	悔しい	男	65 (67.0)	32 (33.0)	.000	1.000		
		女	66 (67.3)	32 (32.7)				
	悲しい	男	89 (91.8)	8 (8.2)	.000	.984		
		女	91 (92.9)	7 (7.1)				
	嫌だ	男	82 (84.5)	15 (15.5)	2.592	.107		
		女	91 (92.9)	7 (7.1)				
特に何も 思わない	男	81 (83.5)	16 (16.5)	5.452	.020 *	男>女		
	女	93 (94.9)	5 (5.1)					

注1) nは度数、pは有意確率

注2) *: $p < 0.05$ (χ^2 検定)

3. 自己肯定感得点別による自己効力感得点・学校適応感得点の体育大会前後の変化

自己肯定感得点低群、中群、高群という違いによって、体育大会直後の感情が自己効力感得点と学校適応感得点に及ぼす影響にどのような違いがあるのかを検討するために、二要因反復測定分散分析を行った（自己肯定感得点低群が表3、中群が表4、高群が表5）。

自己肯定感得点低群では、自己効力感得点が被験者間効果として感情によって有意な差がみられ、A群やB群がC群やD群に比べてどの時期においても自己効力感得点が高かった（表3）。学校適応感得点は感情、時期で有意な差がみられ、A群～C群がD群に比べて学校適応感得点が高く、時期による変化では、体育大会後には一旦下がったものが1ヶ月後には上がる、またはほぼ元に戻るといった傾向がみられた。

自己肯定感得点中群では、自己効力感得点が感情と時期によって有意な差がみられ、B群が他の群に比べて得点が高く、時期による変化では、全体で見ると体育大会後に一旦上がり1ヶ月後に元に戻るまたは下がるという傾向であった（表4）。学校適応感得点は時期、時期×感情の交互作用において有意な差がみられ、A群は時期ごとに得点が上昇するのに対し、B群～D群はV字を描き、群によ

り動きに違いをみせた。

自己肯定感得点高群では、自己効力感得点、学校適応感得点共に被験者間と被験者内のどちらにおいても有意な差はみられなかった(表6)。各得点をみると、全体的に自己肯定感得点低・中群に比べて高い傾向を示した。

表3 自己肯定感得点低群における自己効力感得点・学校適応感得点の体育大会後の感情(4分類)と時期による変化

自己肯定感得点低群 (n=61)	体育大会後 の感情	n	被験者間				(二要因反復測定分散分析)				
			体育大会前		体育大会後		被験者間		被験者内		
			n	平均値 (SD)	平均値 (SD)	1ヶ月後	感情 (主効果)	時期 (主効果)	時期×感情 (交互作用)	時期 (主効果)	時期×感情 (交互作用)
自己効力感得点	A群	22	43.0 (9.3)	44.6 (7.0)	41.5 (9.7)	3.151	.032 *	.794	.454	1.318	.255
	B群	16	40.5 (8.1)	38.1 (6.7)	40.6 (6.4)						
	C群	18	37.4 (9.7)	36.6 (9.3)	36.8 (8.8)						
	D群	5	36.2 (4.3)	34.4 (3.4)	33.4 (3.4)						
学校適応感得点	A群	22	38.5 (6.7)	37.3 (6.9)	39.0 (10.2)	3.739	.016 *	4.285	.024 *	.824	.533
	B群	16	37.3 (6.1)	34.9 (4.5)	39.6 (4.8)						
	C群	18	36.2 (9.2)	35.7 (10.1)	36.4 (10.3)						
	D群	5	25.4 (8.1)	25.2 (7.6)	28.2 (8.5)						

注1)nは度数、pは有意確率

注2)*:p<0.05

注3)自己効力感得点(15項目)は15~75、学校適応感得点(12項目)は12~60

注4)体育大会後の感情:A群:ポジティブな感情のみ B群:ポジティブな感情と「悔しい」
C群:ネガティブな感情を含む D群:「特に何も感じない」

表4 自己肯定感得点中群における自己効力感得点・学校適応感得点の体育大会後の感情(4分類)と時期による変化

自己肯定感得点中群 (n=75)	体育大会後 の感情	n	被験者間				(二要因反復測定分散分析)				
			体育大会前		体育大会後		被験者間		被験者内		
			n	平均値 (SD)	平均値 (SD)	1ヶ月後	感情 (主効果)	時期 (主効果)	時期×感情 (交互作用)	時期 (主効果)	時期×感情 (交互作用)
自己効力感得点	A群	28	44.0 (5.6)	44.4 (6.0)	42.8 (7.6)	4.422	.007 *	4.740	.010 *	.920	.482
	B群	14	48.9 (8.8)	50.1 (11.2)	47.4 (10.1)						
	C群	21	42.9 (7.3)	41.9 (5.2)	42.0 (6.2)						
	D群	12	39.9 (4.9)	42.2 (6.7)	38.4 (5.8)						
学校適応感得点	A群	28	39.1 (5.5)	39.7 (5.2)	41.7 (7.2)	2.220	.093	9.926	.000 *	3.687	.002 *
	B群	14	43.1 (5.6)	39.4 (5.9)	43.3 (8.2)						
	C群	21	40.3 (4.8)	35.9 (5.8)	37.7 (5.7)						
	D群	12	37.5 (6.6)	36.6 (5.2)	38.0 (8.4)						

注1)nは度数、pは有意確率

注2)*:p<0.05

注3)自己効力感得点(15項目)は15~75、学校適応感得点(12項目)は12~60

注4)体育大会後の感情:A群:ポジティブな感情のみ B群:ポジティブな感情と「悔しい」
C群:ネガティブな感情を含む D群:「特に何も感じない」

表5 自己肯定感得点高群における自己効力感得点・学校適応感得点の体育大会後の感情(4分類)と時期による変化

自己肯定感得点高群 (n=59)	体育大会後 の感情	n	被験者間				(二要因反復測定分散分析)				
			体育大会前		体育大会後		被験者間		被験者内		
			n	平均値 (SD)	平均値 (SD)	1ヶ月後	感情 (主効果)	時期 (主効果)	時期×感情 (交互作用)	時期 (主効果)	時期×感情 (交互作用)
自己効力感得点	A群	26	47.7 (6.6)	47.4 (7.5)	46.4 (6.1)	.248	.863	1.202	.304	.844	.539
	B群	14	45.9 (6.7)	46.4 (7.4)	47.4 (6.8)						
	C群	15	47.6 (8.2)	48.3 (10.0)	47.0 (9.3)						
	D群	4	51.5 (7.7)	50.8 (12.0)	47.3 (8.5)						
学校適応感得点	A群	26	42.3 (9.2)	41.7 (9.9)	42.0 (10.1)	2.350	.082	.741	.479	1.140	.344
	B群	14	42.0 (6.3)	40.1 (5.8)	42.6 (6.1)						
	C群	15	40.0 (6.3)	40.9 (7.0)	39.8 (6.5)						
	D群	4	33.0 (8.6)	31.5 (9.8)	29.3 (6.2)						

注1)nは度数、pは有意確率

注2)*:p<0.05

注3)自己効力感得点(15項目)は15~75、学校適応感得点(12項目)は12~60

注4)体育大会後の感情:A群:ポジティブな感情のみ B群:ポジティブな感情と「悔しい」
C群:ネガティブな感情を含む D群:「特に何も感じない」

IV. 考察

1. 体育大会後の感情について

体育大会で得た感情は、「うれしい」「楽しい」「わくわくした」「喜び」の4項目で女子の方が男子よりも有意に多かった。内田ら¹⁶⁾は、中学生の学校生活についての調査を行い、女子は、数多くのことに「打ち込んでいる」という意識を持っており、男子に比べ積極的であり、学級をよくしたいという願いが強く、教師の指導の意図を理解し意気に感じて取り組むことを報告している。橋本¹⁷⁾も、大学生の感動経験について調査する中で、男性より女性の方がほとんどの項目で経験率が高いことを示している。また、戸梶⁹⁾は感動体験の効果について検討し、自分の何かを変えた感動的な体験については、同様の感動的体験をしても、その効果には性差があり、女子の方が高い傾向にあったことを示している。これらの先行研究はいずれも、女子の方が男子に比べて自分の体験をより「良かった」「感動した」などと捉えていることを示す結果であり、この点で、本研究での結果はこれらの過去の知見と同様の結果であったことが確認できた。

本研究では、体育大会後の感情をポジティブかネガティブかに着目して4群に分類を行った。体育大会では、運動の得意不得意、結果の優劣などによってポジティブな感情とネガティブな感情が生まれることが想像できるため、ポジティブな感情のみのA群とネガティブな感情を含むC群を設定した。また、「悔しい」という感情にも着目した。当初我々はネガティブな感情として「悔しい」を設定したが、「真剣に取り組んだが結果が出なかった。」等の出来事によって出てくる感情であると考えられることから、ポジティブな感情かネガティブな感情かを判断することが難しいと考えた。また、体育大会は勝敗が関わることから、「悔しい」という感情は他のネガティブな感情よりも多くの回答がみられ、さらに、他のポジティブな感情と重複して回答した者が多数みられた。これらのことから、本研究では「悔しい」を1つの特徴的な感情として取扱い、ポジティブな感情と「悔しい」というB群として分類した。そして、A～C群のいずれにも属さない、「特に何も感じない」と答え体育大会に無関心であるD群を設定した。この分類をもとに検定を行った結果、自己効力感得点と学校適応感得点において、感情の違いによってそれぞれの得点に差が出ており、分類の方法にはある程度の妥当性があったと判断される。

2. 自己肯定感得点別にみた自己効力感得点と学校適応感得点の変化について

今回、自己肯定感得点高群では体育大会後の感情や時期の影響による変化がみられなかった一方、自己肯定感得点低群では体育大会後の感情によって自己効力感得点や学校適応感得点に差がみられ、学校適応感得点は時期によっても変化がみられた。これは、自己肯定感得点高群は元々の自己効力感や学校適応感が高く、また自信の高さから他の影響を受けにくいということ、逆に自己肯定感得点低群は他の影響を受けやすいことが考えられる。井上¹⁸⁾は、大学生を対象に自己概念の明確性と時間的安定性について、自尊感情の水準の違いによってどのような差がみられるかを検討した。その結果、高自尊感情者は低自尊感情者と比べて自己概念の明確性や確信が高く、時間的に安定していること、それに対し低自尊感情者は自己概念の明確性や確信が低く、時間的に不安定であることを明らかにした。この調査で井上は、自己概念として、両極の形容詞対について自身をどのように見ているか、また対人的形容詞について自分がどのくらいそのように振る舞うかを質問している。自身に関する形容詞対では「謹厳な－気楽な」「慎重な－自発的な」などといった項目を、対人的行動を示す形容詞対では「考えを明確に表現する」「主張すべきは主張する」「友好的に」「自信に満ちた」「防衛的な」「引っ込み思案の」などといった項目を使用していた。これらは、本研究で我々が自己効力感や学校適応

感に関する項目で使用した内容と類似する項目であり、測度自体は異なるものの、近い概念であると思われる。よって、本研究において体育大会前後で自己肯定感得点高群の自己効力感得点や学校適応感得点に変化がなかったことや、自己肯定感得点低群の自己効力感得点や学校適応感得点の変動したことは、井上が示した結果と類似していると考えられる。

一方、自己肯定感得点中群は、低群や高群に比べ、体育大会によって自己効力感や学校適応感が変化しやすい、つまり影響を受けやすいことが示唆された。溝上¹⁹⁾は、青年の自己評価について述べる中で、低くも高くもない自己評価を示すタイプの青年について、『『悪くなければそれでいい』式で青年期を過ごしている。自己評価が高いかどうかはわからないが、否定的になっていないことは確かである。なぜなら、否定的になる理由がないからである。その代わりに、自分を支えるだけの誇りうる自我の側面をもっているわけでもない。』と述べている。また、大学生を対象としたWHY法による自己評価に関するインタビュー調査によって、自己評価の高いとも低いともいえない自己評価の中間群は、表向きは自己評価の低い者の特徴をベースとした否定的な様相を示しているが、肯定的な生活感情に支えられているということを明らかにしている²⁰⁾。これらは、本研究で自己肯定感中群が安定した自己効力感や学校適応感を持っておらず、自己肯定感低群と同様自己効力感や学校適応感が変動しやすかったことを裏付ける結果である。

学校においては、中間層の子どもやいわゆる不適応と呼ばれる子どもが多く存在する。それらの子どもたちにとって、体育大会は様々な感情の出現をもたらし、自己効力感や学校適応感に影響をもたらすことが示唆された。特に中間層の子どもは、時期による影響も大きく受けやすいことから、学校においてはこれらの子どもたちに対してよい影響をもたらす活動を行うことで、全体としての学校行事の成功や心身の発達につながるのではないかと考える。

V. まとめ

本研究では、体育大会が自己効力感や学校適応感に及ぼす影響について、中学校3年生を対象にアンケート調査を行い、自己肯定感の得点別に検討を行った。その結果、体育大会後の感情は性別により異なるが、多くの生徒がポジティブに捉えていたこと、体育大会によって特に自己肯定感低群や中群で自己効力感や学校適応感に変動がみられることが明らかになった。今後は、その後の自己効力感や学校適応感の動きや他の学校行事における影響について調査し、中学生の自己効力感や学校適応感の実態について明らかにしたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領，第5章 特別活動，118-121，東山書房，2008
- 2) 後々陽子：学校行事ではぐくまれる力 ―運動会・音楽会の実践により子どもたちがみにつける力と変容―，道徳と特別活動，32-35，2008
- 3) 国立青少年教育振興機構：「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書，2010
- 4) 西山香織：思春期における「自己肯定感」に関する研究，立命館教育科学研究，第5巻，17-41，1995
- 5) 宮本正一，今井由紀：集団宿泊体験を通しての自己効力感の変容，岐阜大学教育学・心理学研究紀要，第12号，71-83，1994
- 6) 関根章文，飯田稔：キャンプ経験が児童の自己概念と一般性自己効力に及ぼす影響，筑波大学体育科学系紀要，第19巻，85-89，1996

- 7) 長谷川祐介：家庭背景別にみた学校行事の教育的意義 —体育大会を事例に一，比治山大学現代文化学部紀要，第16号，135-144，2009
- 8) 横山正幸：子どもの自尊感情と体験の関係について，日本生活体験学習学会誌，第10号，53-62，2010
- 9) 戸梶亜紀彦：『感動』体験の効果について —一人が変化するメカニズム—，広島大学マネジメント研究，第4巻，27-37，2004
- 10) Rosenberg, M: Society and the Adolescent Self-Image, Princeton University Press, 1965
- 11) 松下覚：Self-Imageの研究，Self-esteem scaleの作成，日本教育心理学会総会発表論文集，11，280-281，1969
- 12) 成田健一，下仲順子，中里克治，河合千恵子，佐藤眞一，長田由紀子：特性的自己効力感尺度の検討 —生涯発達の利用の可能性を探る—，教育心理学研究，第43巻，第3号，306-314，1995
- 13) 石田靖彦：学校適応感尺度の作成と信頼性，妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性 —他方法相関行列からの検討—，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，第12号，287-292，2009
- 14) 斉藤哲瑯，藤原昌樹：子どもたちの地域活動や感動体験に関する研究調査，川村学園女子大学研究紀要，第14巻，第1号，153-176，2003
- 15) 大出訓史，今井篤，安藤彰男，谷口高士：音楽聴取における“感動”の評価要因—感動の種類と音楽の感情価の関係，情報処理学会論文誌，第50巻，第3号，1111-1121，2009
- 16) 内田利広，川戸智司行：思春期における「心の拠り所」となる学校生活に関する研究，京都教育大学教育実践研究紀要 第2号，143-157，2002
- 17) 橋本巖，小倉丈佳：青年期における感動経験と共感性の関係，愛媛大学教育学部紀要，教育科学，第48巻，第2号，57-73，2002
- 18) 井上祥治：自尊感情と自己概念の明確性および時間的安定性，岡山大学教育実践総合センター紀要，第8号，73-80，2008
- 19) 溝上慎一：自己の基礎理論 実証的心理学のパラダイム，金子書房，1999
- 20) 溝上慎一：青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相 —青年の内在的視点と固有の文脈を考慮して—，京都大学大学院教育学研究科博士学位論文，2003